

アユは語る

消えた満ち引き

よどむ流れ川下り阻む

昨秋は六往復した。岐阜市から三重県桑名市の長良川河口堰まで片道五十キロ。ワンボックスクスカーに水を敷いた即席の保冷車に、上流でとれた天然アユの卵を積んで。

「河口まで卵をもつていってやらないと、アユが春に海から上ってこれん。岐阜でふ化したも万が一匹、海までいけるかどうかな」。堰上流の人工水路でアユのふ化に取り組む長良川漁協の山中茂副組長合長(左)も苦笑いする。

原因はわからない。春、再び川をのぼる。でも、堰で流れは緩上するアユの数を増み、川から自然の潮の

昨秋は六往復した。岐阜市から三重県桑名市の長良川河口堰まで片道五十キロ。ワンボックスクスカーに水を敷いた即席の保冷車に、上流でとれた天然アユの卵を積んで。

「河口まで卵をもつていってやらないと、アユが春に海から上ってこれん。岐阜でふ化したも万が一匹、海までいけるかどうかな」。堰上流の人工水路でアユのふ化に取り組む長良川漁協の山中茂副組長合長(左)も苦笑いする。

原因はわからない。春、再び川をのぼる。でも、堰で流れは緩上するアユの数を増み、川から自然の潮の

人の手借り やっと河口へ

満ち引きが消えた。アユは春に海から上ってこれん。岐阜でふ化したも万が一匹、海までいけるかどうかな。堰上流の人工水路でアユのふ化に取り組む長良川漁協の山中茂副組長合長(左)も苦笑いする。

原因はわからない。春、再び川をのぼる。でも、堰で流れは緩上するアユの数を増み、川から自然の潮の

「直接河口へ放すば、引き潮に乗り自然と、春に驚くほど上って海に出られたといってくる。評判ええよ」。汽水域はエサも豊と山中さん。水路まで富で「汽水域にたどり運ぶ受精卵の数は五年着けばゴール」だった。それは消えた潮に代わ

その汽水域は河口から、途切れた自然のつ

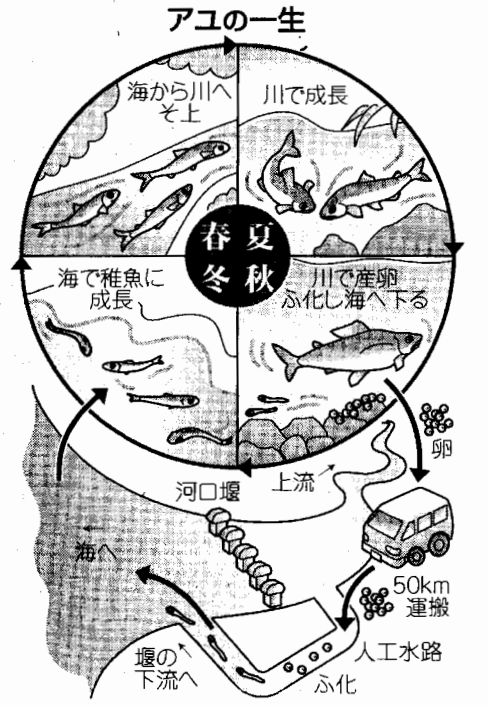
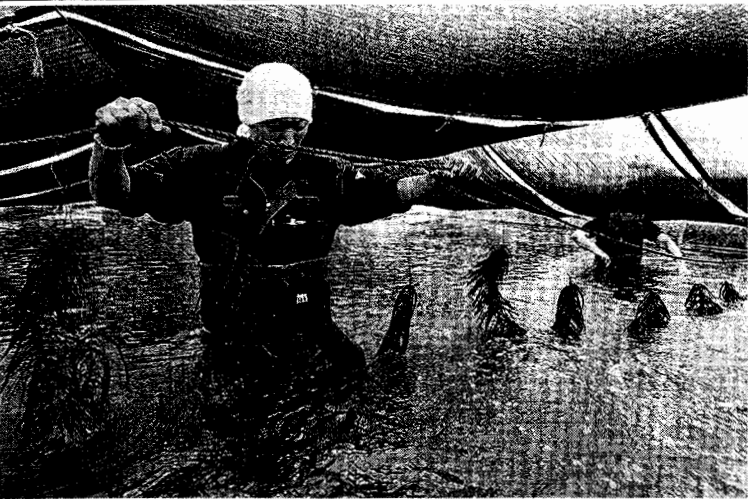
満ち引きが消えた。アユは春に海から上ってこれん。岐阜でふ化したも万が一匹、海までいけるかどうかな。堰上流の人工水路でアユのふ化に取り組む長良川漁協の山中茂副組長合長(左)も苦笑いする。

原因はわからない。春、再び川をのぼる。でも、堰で流れは緩上するアユの数を増み、川から自然の潮の



潮の干満の影響があった水域

紫外線よけのネットの下で受精卵についた泥を洗い落とす都上漁協職員(左)と武蔵和代さん。朝7時に都上を出てきた三重県桑名市の長良川河口堰で



幅五・五キロ、長さ百十回全国豊かな海づつを導く。卵を紫外線から守るネットが覆う。よの意味を見つめる。

ら五・四キロある長さながらを、人の手で必六百六十一回の河口死で繕っているように堰で分断され、堰上流見える。(山本真嗣)

海、川、山々のつながりの中で生き、郷土に多くのおもいをもちきた「県の魚・アユ」は、今、何を語りかけているのか。六月に開市で開かれる「第二回全国豊かな海づつ大会」を前に、アユを導く「よ」の意味を見つめる。

アユは語る

春の使者に堰堤の影

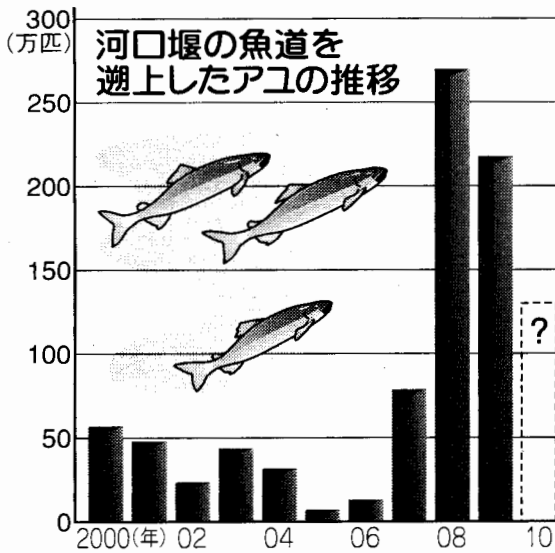
「あれだけいなかったアユがどうして...」。全と伊藤さん。

「あれだけいなかったアユがどうして...」。全と伊藤さん。国のアユ釣り大会で優勝経験もある中津川市の伊藤正弘さん(五五)は、ここ数年の長良川のアユの増えっぷりに目を見張る。川に近づくと、たくさん

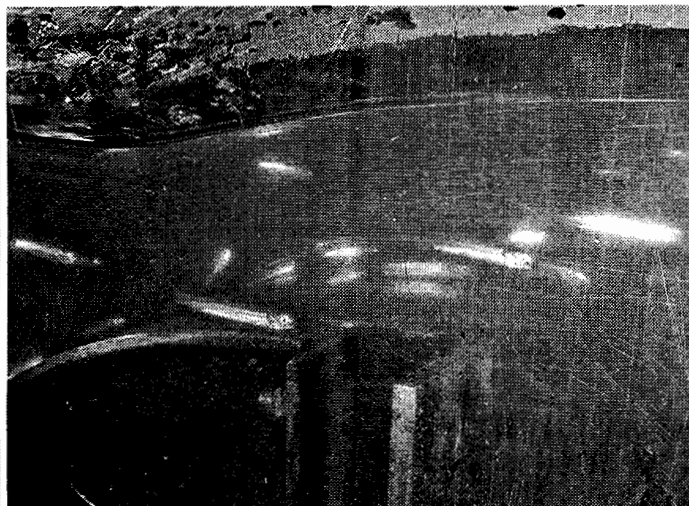
の魚影が散り、水面をはねる姿も。「アユが川口の堰の運用が始まって以来、釣れない年が続い

変 激 上 遡

②



河口堰の魚道を遡上したアユの推移



河口堰の魚道を遡上する稚アユ=三重県桑名市の長良川河口堰で (長良川河口堰管理所提供)

た。「長良川は死んでい... 六万匹から、〇五年には組みを始めた。その後、長良川の遡上... 同漁協の調査地は河口から約五十キロ上流。他の漁協がそこよりも下流や支流で行った調査では遡上は確認されており、ダム管理所は「大きな影響はない」と話す。

ところが、木曾三川の管内でアユの不漁は続いている。損斐川では別の調査をしておらず、どなたも確認できない日がある。今年も訪れる。 (山本真嗣)

第1部 途切れたつながり

細る漁場

③

漁場は河口から四十キも上流の長良大橋周辺。それでもダム湖のように静かな川面を見つめ、大橋さんはため息をついた。

十年ほど前まで、同じ場所で大橋さんのアユが捕れた。「一人三百匹捕ったら帰ろう」。弟の修さん(もと兄弟二人で一日六百匹。七月中旬から「来る日も来る日もアユばかり」。それでも捕

アユは語る

アユの遡上が多かった。昨夏も、その前の夏も、長良川の川漁師大橋亮一さん(もと)羽島市の漁場で、網を入れてもアユは一匹も捕れなかった。「どれだけ遡上しても、エサがないところにアユはいませんわ。流れのある、もっと上流にいかない」と

らい大きかった」

アユは春に海から川を遡上した後、中上流域の瀬や淵に居着き、石についた藻を食べる。大橋さんの漁場にも、昔は良い藻のつく石があり、ザーとせせらぎの音が聞

こえる浅瀬があった。小が目立つようになった。さなアユが身を休める中、州も、深い淵もあった。下流六キの漁場が、十年だが、川は少しづつ変

わってきた。岸はコンクリートで固められ、度重なる改修で中州や浅瀬がスやウナギ、モクスガ二

消えた。そして、長良川で生計を立てる。「売れ

重なる改修 堰がとどめ

河口堰＝三重県桑名市。一九九五年に運用を始めるのと、全く別の川に変

るのは、みんな海と川を

行き来する魚ばかり」。

そのサツキマスも激減し、モクスガ二も昨秋は

流れがゆるみ、鏡のように静まりかえった川面をモクスガ二魚に出る大橋さん兄弟＝昨年11月、羽島市の長良川で

口堰管理所によると、川がせき止められて水がたまる影響が出るのは三十キ上流まで。でも、さらに十キも上流の大橋さんの漁場でも、流れが緩み、水がよどんだ。大雨で流人した土砂は下流に流れず、石を覆った。アユの食べる藻は消え、流れの少ない止水域に生える外来種のオオカナダモ

「残したってくだせえ。海とつながったええ川を」。河口堰ができる前、そう呼び続けた。それが、今、川漁師も自分の代わり」と思う。

「人間が川をなぶればなるほど悪くなる。長良川は一本の排水路になってしまった…」

(山本真嗣)

第一部 途切れたつながり



アユは語る

「小さい、小さい。網には通常二〇センチ以上に成るの目から抜けてってしま

た。稚魚のような最近のアユは初秋の早い時期に流れが緩くても何とか海アユとは、別の魚のよう。産卵。しかし、卵がふ化に下ることができ。遅長良川で二十年間、アユとしても、水温が高いと体くに海に出たアユの子はユの産卵の観察を続けて力の消耗が激しく、堰で翌年の遡上も遅れる。昨いる生態研究者で写真家流れの緩くなった川を下年は七月に遡上する稚アの新村安雄さん(五十)岐り切れずに死んでしまユも少なくなかった。

「小さい、小さい。網には通常二〇センチ以上に成るの目から抜けてってしま

た。体高はたばこの箱より高く、胴回りは片手で握れないくらい太かった。藻を食べて大きく育った下がり、ふ化したアユは下がってから海に下る小

産卵期の落ちアユを投網で狙う長良川の秋の風物詩「瀬張り網漁」。昨年十一月下旬、岐阜市の鏡島大橋下流の漁場で、長良川漁協の組合員の男性(左)は嘆いた。

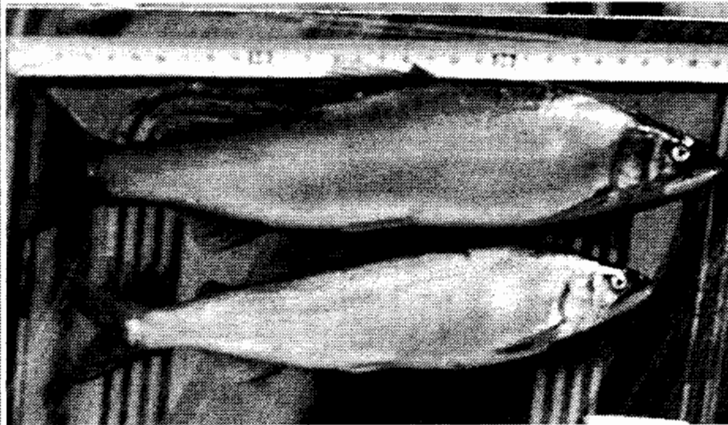
大量遡上で小型化加速

魚影を見定め、網を打つ。でも、アユはややすすと一・五センチほどの網の目を抜けてしまうほど小さい。かろうじてかかる獲物はほとんどが一五センチ程度だ。

さなアユの子しか生き残れない」とみる。さらに、ここ二年の近年にない大量遡上で、限られた餌を奪い合い、小型化に拍車が掛かったとみられる。

半世紀、長良川に通い続けているが、年々アユが小さくなってきたと感じる。「今年は特に小さい。数は多いけど」。姿形もどことなく変わってきた。「昔はもともとひれが大きく、ピンとしていた」

春に海から遡上し、夏の間、川の石につく藻などを食べて育つアユは秋



④20年ほど前に岐阜市の長良川で漁協組合員が釣った30センチもある大アユ ⑤昨年11月、同市の長良川でとれた15センチ程度の落ちアユ



長良川の川漁師大橋亮一さん(七十)「羽島市」によると、昔は近年をはるかに上回る稚魚が遡上したが、秋には皆二〇センチを超えていたという。大橋さんは言う。「昔の長良川には、それだけのアユをはぐくむ力があつた」

(山本真嗣)

第一歩 途切れたつながり

アユは語る

「石がない」

岐阜、愛知県境を流れる木曾川の風物詩「日本ライン下り」の元船頭で鵜匠の武藤孝義さん(左) 愛知県犬山市は昨秋、三十年ぶりに船を操り、一変した景色に驚いた。

母なる石

各務原市と犬山市を結ぶライン大橋上流。河原にごろごろしていた玉石は消え、代わりに木々が生い茂る。アユが産卵をしていた小石の浅瀬もなくなり、岩盤があらわに。

アユの産卵床は砂利が敷き詰められた瀬で、小石の間に卵が入り込むすき間がある「浮き石」状

⑤ 浮き石が残る川で、産卵するアユを探す新村安雄さん。後方は金華山。岐阜市の長良川で

態であることが必要。愛から」

北漁協(犬山市)の江口 豊富な水量や硬い河床

る。初秋の大雨は水量の

ダムより下流の石や砂は

部でアユの産卵が見られる。金華山を望む長良橋

真一組合長(五)は「二十年ほど前にはまだ犬山あ曾川は正時代以降、本流だけでも十一のダムやする群れに出合った。今堰が造られた国内屈指のはさっぱり」。そして言切った。「ダムがある自然の川では上流の石や砂利が下流に運ばれ

少ない夏に固まりかけた水温が保たれているという。だが「いつまで持つ川底は自然と浮き石状態となった。だが、ダムは産卵床の元になる石や砂利の流れを遮断。新しい石が供給されないまま、ダムより下流の石や砂は部でアユの産卵が見られる。金華山を望む長良橋下流には今も砂利や小石が残り、多くのアユが命をつなぐ。」

卵のベントダムで消滅

流失し、浮き石も消えた。

その長良川の産卵床も安泰ではない。長良川漁協の大橋亮一組合長代理によると、河口堰の運用

その上、しゅんせつなどの治水対策で河床は低くなり、冠水しない河原に草木が根付いた。江口組組合長は「緑がきれいに見えるかもしれない。でも、アユの命の源になる石はもうない」と嘆く。木曾川の現在の主な産卵場はライン大橋より十キロ下流の河川環境楽園(各務原市)から新木曾川大橋(笠松町)付近までは安定してきた。アユの産卵はその象徴だ」と



第一部 途切れたつながり

ており、産卵に適した低 (久下悠一郎)

アユは語る

「タッターンときて、ギューンときおを引つ張る。最初はコイが引つ掛かったと思つた」。二十年ほど前、岐阜市の長良川で三〇移の大アユを友釣りで釣つた長良川漁協の組合員男性(六八)は、今もその強烈な手応えが忘れられない。

縄張り守る。闘志減退？

たアユをおとりにして放し、攻撃してきたアユを釣り上げる。ところが、釣り人たちは長良川だけでなく、県内のその他の川でも「アユがおとりを追わず、釣れなくなつた」と実感している。

長良川支流で、県内屈指の放流の場所となつてきた「温室育ち」の放流水プールで半年ほど育てている関市の板取川。が増えたことを指摘。一、三十年ほど前は最上流部で民宿を営む同方、海から遡上する天然川上流漁協の日置香さん(六〇)は「釣り場では縄張りをつくるどころか、群れをよく追つ」と解説す

「安定的に供給できる」(同センター)人工産に切り替えた。

同センターの松木和茂事務局長は「放流魚が100%センターの人工産で、釣果が良い川もある。これまでよく釣れた、縄張り意識の強い琵琶湖産が減つた分、アユの性質が変わつたように思えるのでは」とみ

追わない理由

アユが居着いていそうな石におとりアユを近づけると、縄張りを荒らされて怒つた大アユが、水面までおとりを追つ掛けてきた。「昔の魚には勢いがあった。今、そんなアユは少なくなつた。アタリもツンツンとくるくらい」

⑥ アユは成長すると、エサの藻がついた石のあるエリアを縄張りを持ち、侵入してきたほかのアユ



解禁日に多くの釣り客でにぎわう板取川＝昨年6月、関市洞戸大野で

とため息をつく。全国のアユ釣り大会で優勝経験もある中津川市の伊藤正弘さん(五五)も「五十四匹、百匹で群れているから、泳いでいるうちにおとりに引掛かる。釣果の三分の一は友釣りじゃない、まぐれだろう」と話す。

なぜ、闘争本能が薄れたと感じられているのか。伊藤さんは「人工の海水プールで育てた放流アユは群れやすいのでは」

「苗センター(美濃市)が琵琶湖産が琵琶湖産だ。アユは変質し生産する。残りは、海にたのたのか、古き良き時代を夢見る太公望の気のせいかな。真偽は不明だが、県内の川にはさまざまな場所、環境で冬を越したアユが入り交じる。」(中尾吟、山本真嗣)

第一部 途切れたつながり

アユは語る

ダム湖新たな繁殖地に

一九九三年春。恵那市なダムがいくつもあり、と中津川市境にある木曾阿木川ダムより上流に遡川水系の阿木川ダム湖で「変わった魚が釣れた」と恵那漁協(中津川市)に持ち込まれた半透明の小魚を見て漁協の組合員は驚いた。その時期にダム湖にいないはずの、アユの子もだった。

アユは海と川を行き来する回遊魚。春に稚魚が海から川を遡上し、夏に成魚に育ち、秋に産卵して一年で一生涯を終える。ふ化したアユの子は、エサのプランクトンが豊富で暖かい海に下って冬を越し、春に再び川を遡上する。

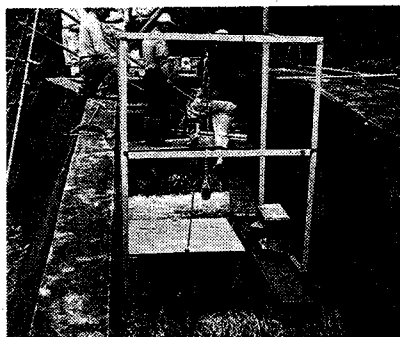
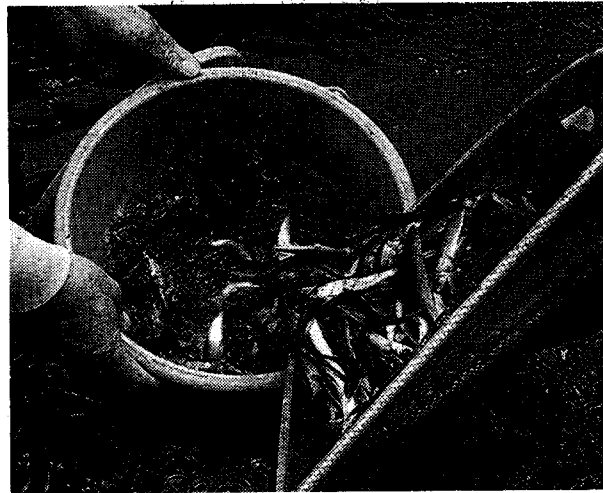
⑦ だが、木曾川の河口から約百十キロ上流に九一年設置された阿木川ダムは堤高百尺。下流にも大き

ために毎春、琵琶湖産の県河川環境研究所が調査。漁協の放流魚が川で阿木川と岩村川に放流産卵し、ダム湖を海の代わりにして自然繁殖して「魚」が持ち込まれたのいることが分かった。は、その年の稚魚を放流。回遊魚でありながら、海に下らなくなったこの

その後、放流前にダム湖で稚アユの群れが目撃されたため、九六年に例だが、人工のダム湖で

繁殖が確認されているのは中部では阿木川ダムだけだ。同研究所によると、同ダム湖は冬の最低水温が六・四度と温かい。また、ダム湖上流の川の流域には集落や工場、牧場などがあり、流入する生活・産業排水で湖が富栄養化。アユの子のエサとなるプランクトンが豊富で「越冬条件がそろっている」という。

「うわさはあったが、本当に繁殖していたのか」。天然アユの遡上がなくなり、毎年、琵琶湖産の稚魚の放流に頼っていた恵那漁協は「自前のアユがとれる」と色めき立った。同漁協は九七年から陸封アユの稚魚の捕獲と、



⑤放流される陸封アユ ⑥阿木川ダム湖の陸封アユの稚魚を捕獲する恵那漁協の組合員ら(いずれも中津川市阿木で(恵那漁協提供))

第一部 途切れたつながり

（本田英寛、山本真嗣）

アユは語る

「隣でブラックバスを釣っていた。四〇秒はあったよ」

昨夏、長良川支流の上流にある伊自良湖(山

津市)の釣り客から聞いた言葉に、湖を管理する「ニューいじら湖荘」の藤田力弥さん(四七)は驚いた。三年前の湖の水抜きで、外来魚はすべて駆除したはずだったのに。

日本では確認されているブラックバスには、いずれも北米原産で体長が四〇センチを超えるオオクチバスやコクチバスなどがある。一般的に知られているオオクチバスが流れのない池などの止水域を好むのに対し、コクチバスは流れのある川でも繁殖でき、魚の捕食性も高い。

「隣でブラックバスを釣っていた。四〇秒はあったよ」

二〇〇六年に伊自良湖ではこのコクチバスが見つかり、騒動になった。藤田さんによると、コク

チバスは「一年くらいで一気に増えた」。伊自良湖は伊自良川を通じて長良川につながる。湖では泳ぐフナや稚魚の群れに四〇秒を超えるコクチバスも釣られており、「放すも釣ればアユなどの在来種が大打撃を受ける」と危機感を持った山県市が十四年ぶりの水抜きと駆除を決めた。

昨夏、伊自良湖で釣れた魚がコクチバスなのか、オオクチバスなのか、全く別の魚なのかは判明していない。毎日、湖畔に出る藤田さんも水抜き後はブラックバスを見ていない。でも、「釣れた」という情報は昨夏、二回寄せられた。

「何かバスらしきものがあるのは確かかなようだ」

「オオクチバスのいる池からウシモツゴなど貴重種が姿を消した。コクチバスが川に広がれば、川で同じことが起

清流に迫る外来魚の影

新たな脅威

「何かバスらしきものがあるのは確かかなようだ」



ブラックバス・ブルーギルを他の水域に放流したり、生きたまま持ち運ぶことは法律で禁止されています。絶対にやめて下さい。山県市

2006年にコクチバスが見つかり、水抜きをして外来魚を駆除した伊自良湖。ワカサギ釣りがシーズンを迎えている＝山県市長滝で

「何かバスらしきものがあるのは確かかなようだ」

「オオクチバスのいる池からウシモツゴなど貴重種が姿を消した。コクチバスが川に広がれば、川で同じことが起

第一部 途切れたつながり

本流でもすでにオオクチバスは確認されている。(柴田久美子、山本真嗣)

全国一の放流量

アユは語る

「稚魚が足りない」。県魚苗センター(美濃市)の船木和茂事務局長は昨年四月上旬、海水をはった飼育池で育っているはずのアユの稚魚が注文より七割も少ないことを知り、がくせんとした。

同センターは県内の漁協が春に川へ放流する稚アユの四―五割を生産する。前年の秋に木曾川で捕った親アユの卵を人工ふ化。水温調節や病原菌対策などに最新技術を駆使する全国屈指の施設だ。

昨年は三十一漁協からの注文分五千一トを生産

人工産のアユの稚魚を育てている海水の飼育池。美濃市生櫛の県魚苗センターで

生存率が悪かった」と船木さん。計画通り育たないトラブルは一九八三年の設立以来、二〇〇二年に続き二度目。漁協は急ぎよ、他県産など別の稚魚確保に奔走することを余儀なくされた。

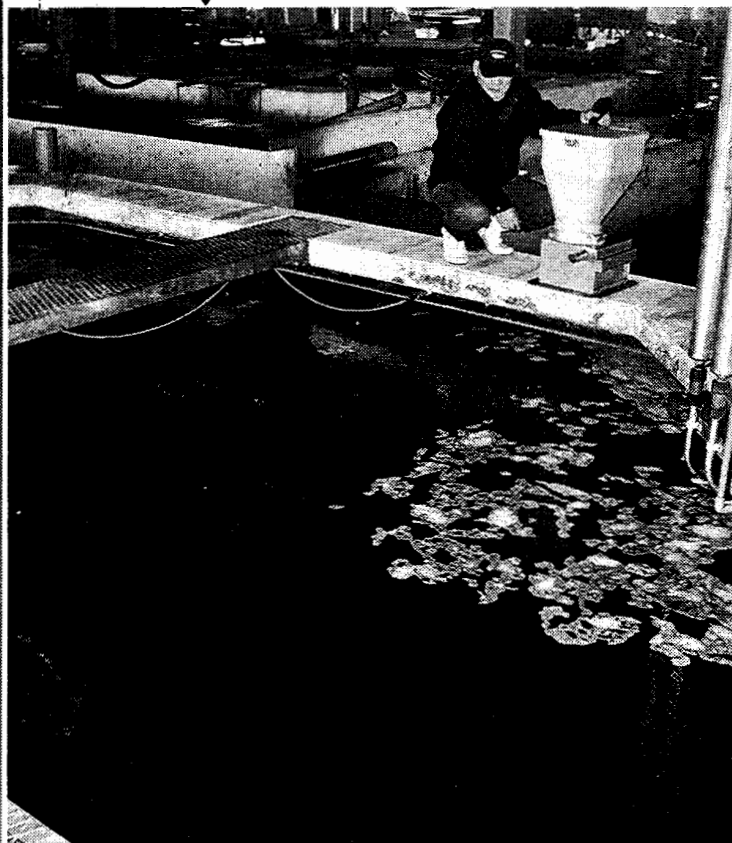
を県から与えられる代わり、資源保護のために「増殖の義務」が課せられるため。放流量に上限はなく、実際は漁獲量増加や釣り客を満足させるため、義務量以上の稚魚を放流している漁協が多

「県レッドデータブック」を十年ぶりに改訂する。アユと同じように海と川を行き来するサツキマスは、毎年の放流にもかかわらず漁獲量が激減しており、新たに準絶滅危惧種に掲載される。

改訂作業にあたった岐阜大の向井貴彦准教授(魚類生態学)は「自然繁殖していなくても、大量放流されればだ。放流量は九五年の百五十トをピークに高水準で維持されており、漁協関係者は「天然遡上が減少した」といふかった。

一方、実際に川で捕れたアユのうち、どれだけ絶滅危惧種くらいにするべきだったかもしれない(山本真嗣) 第一部長終わり

人介さねば絶滅恐れ?



第一部長 途切れたつながり

「人の手を介さず、在来の魚がどれくらいいるかを考えると、アユも準絶滅危惧種くらいにするべきだったかもしれない」

第一部長終わり